

高校生における高齢者疑似体験前後のイメージの変化

藤田 和加子*

大阪信愛女学院短期大学

Human and Environment Vol. 12 (2019)

Changes in images before and after an elderly person simulation experience
among high school students

Wakako Fujita

Osaka Shin-Ai College, Japan

The aims of the present study were to make it possible for high school students to imagine the physical and psychological characteristics of elderly persons through an elderly person simulation experience and to deepen their understanding. The aging rate in Japan reached a record high of 28.1% in 2018, but education concerning the elderly and aging remains inadequate.

A total of 29 second-year nursing course students from A High School participated in a lecture on the physical characteristics and background of elderly persons and subsequently participated in an elderly person simulation experience. Before and after the experience, the students were asked to freely write their "image of the elderly" in an anonymous format. The text of the free responses was analyzed using the free software KH-Coder, and text mining was subsequently performed followed by a hierarchical cluster analysis. The results revealed that five clusters were indicated as valid both before and after the elderly person simulation experience. Before the experience, the students had a combined negative image of elderly persons and an image of healthy elderly persons, but after the experience it became a negative image. However, the free responses after the experience showed that they realized the need for sympathetic understanding and support for elderly persons, making comments such as "It is necessary to talk with elderly persons in need" and "Environments in which elderly persons can be comfortable should be increased."

Key words: Elderly person · Simulation experience · Image

1. 緒 言

医療の進歩や QOL の向上を心掛けて生活している

高齢者も増加傾向にあることから、日本の平均寿命は年々延びている。日本の高齢化率は、平成 30 年には 28.1%と過去最高[1]であるが、日本老年学会では、75歳を高齢者と定義することが提案されているほど、65歳以上を一律に「高齢者」とみる一般的な傾向は現実的なものではなくっているとされている[1]。

1999年～2010年の高齢者イメージに関する研究についてみると[2][3][4][5]、高齢者に対するネガティブと考えられるイメージが、講義や実習を通して、いかにポジティブに捉えられるかが、焦点となっている論文が多くみられる。高校生による高齢者のアンケート

*大阪信愛学院短期大学看護学科
〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見 6-2-28
TEL: 06-6180-1041
E-mail: w-fujita@osaka-shinai.ac.jp

受付：2019年8月13日 受理：2019年8月30日

©2019 大阪信愛学院短期大学

からは、身体的な衰えがあるとイメージされるものの、高齢者や老化に関する教育が生涯教育の視点から学ぶことが不足しており、正しい老化を学ぶには不十分な状況であることが示されている[6]。

そのため、加齢による身体の不具合や心理面の変化など、想像することが困難であり、看護を目指す生徒と高齢者の歩んできた時代の生活背景が大きく異なるため、高齢者の信条や価値観を理解することは難しい。本研究は、将来看護師を目指す高校生が、加齢に伴う高齢者の身体的・心理的特徴をイメージできる高齢者疑似体験により、高齢者理解がどのように深められるか検証することを目的に行った。

2. 研究方法

2.1. 研究対象

A 高校看護コースの2年生で、同意が得られた29名

2.2. 研究期間

平成30年1月～3月

2.3. 調査内容

対象者に対し高齢者の身体的特徴・時代背景(戦争、経済、生活など)の講義後、高齢者疑似体験(手足首に重りで負荷、固定ベルトで肘、膝、腰の動きを抑制、手指感覚を鈍磨する手袋、視野欠損と白内障の視覚機能の変化を想定したゴーグルおよび耳栓を装着して杖を持って歩く)をした。体験前後に「高齢者のイメージ」について無記名にて自由記述してもらった。

2.4. 分析方法

自由回答文の解析はフリーソフトウェア KH-Coder (khc.sourceforge.net) を用いてテキストマイニングを行った。高校生の高齢者のイメージの分析に直接関係のない助詞や句読点を除去し、テキストデータと単語頻出語の分析結果から、同じ意味で用いられる語がないかを検索し、意味が共通する単語に置き換え、データクリーニングをした。調査結果の中で、頻回に出現した上位100語を頻出語とした。頻出語の出現パターンの似通った語の組み合わせを検討するために、出現回数3回以上のもののうち、名詞、サ変名詞、形容動詞、ナイ形容、副詞可能、タグ、名詞 C、を用いて Ward 法による階層的クラスタ分析を行った。

2.6. 倫理的配慮

対象者に対して、研究の目的、意義、方法、研究への参加は自由意思であること、同意しない場合や研究途中での中断をしても不利益を被らないこと、また調査で得られたデータは個人が特定とされないよう無記名とし、匿名性・プライバシーの保護の厳守、研究及

び学会発表後は、全てのデータを破棄することを文章と口頭で説明した。本研究は、所属施設の大阪信愛学院短期大学、研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

3. 結果

3.1. 単語頻度分析

高齢者疑似体験前の総抽出語数は1183語で、上位10位以内の頻出語は、【人】【身体】【生活】【目】【腰】【散歩】【病気】【高齢】【家】【好き】であった。最も多かった【人】では、「優しい人」「無口な人」などがあり、【生活】では「ゆっくりとした生活」「楽しい生活」などと記述されていた。

また、体験後の総抽出語数は1376語で、上位10位以内の頻出語は【身体】【大変】【高齢】【人】【目】【今】【体験】【不自由】【耳】【行動】であった。最も多かった【身体】では「身体が重い」「身体が不自由」などと記述されていた。

3.2. クラスタ分析

クラスタ分析の結果から、高齢者疑似体験前後共に、5クラスタが妥当だと判断された(表1、表2)。

体験前的高齢者のイメージでは、クラスタ1は「腰」「早寝」「早起き」を含む【早寝早起き】、クラスタ2は「散歩」「好き」「自分」「家」「生活」「買い物」「趣味」「人」を含む【興味を持っている】、クラスタ3は「イメージ」「席」「高齢」「普段」「認知」「骨」を含む【高齢者は骨が弱い】、クラスタ4は「目」「耳」「病気」「低下」「色々」を含む【病気を持っている】、クラ

表1 高齢者疑似体験前の高齢者のイメージ

| クラスタ1 | クラスタ2 | クラスタ3 | クラスタ4 | クラスタ5 |
|-----------|--------------|--------------|--------------|-------------|
| 早寝 早起き | 趣味を 持っている | 高齢者は 骨が弱い | 病気を持って いる | 体操を している |
| 腰 | 散歩 | イメージ | 目 | 体操 |
| 早寝 | 好き | 席 | 耳 | 身体 |
| 早起き | 自分 | 高齢 | 病気 | 機能 |
| | 家 | 普段 | 低下 | |
| | 生活 | 認知 | 色々 | |
| | 買い物 | 骨 | | |
| | 趣味 | | | |
| | 人 | | | |

表2 高齢者疑似体験後の高齢者のイメージ

| クラスタ1 | クラスタ2 | クラスタ3 | クラスタ4 | クラスタ5 |
|--------------|-------------|--------------|----------------|--------------|
| 生活が 大変である | 苦勞を している | 身体に負担 がある | 高齢者は 不自由である | 助けが 必要である |
| 体験 | 自分 | 負担 | 戦争 | 視野 |
| 大変 | 苦勞 | 身体 | 今 | 周り |
| 目 | | 耳 | 人 | 階段 |
| 時間 | | | 声 | 必要 |
| 行動 | | | 高齢 | |
| 生活 | | | 不自由 | |

スター5は「体操」「身体」「機能」を含む【体操をしている】とした。

体験後の高齢者のイメージでは、クラスター1は「体験」「大変」「目」「時間」「行動」「生活」を含む【生活が大変である】、クラスター2は「自分」「苦勞」を含む【苦勞をしている】、クラスター3は「負担」「身体」「耳」を含む【身体に負担がある】、クラスター4は「戦争」「今」「人」「声」「高齢」「不自由」を含む【高齢者は不自由である】、クラスター5は「視野」「周り」「階段」「必要」を含む【助けが必要である】とした。

4. 考察

高齢者疑似体験前のクラスター分析より、【高齢者は骨が弱い】【病気を持っている】など、マイナスイメージも見られたが、【早寝早起き】【興味を持っている】【体操をしている】など健康的な高齢者のイメージも見られた。これは、対象者の祖父母が老年期を迎えていないことも多く、また老年期であっても前期高齢者で自立している高齢者が多いことから、比較的、健康的な高齢者を捉えていると考える。しかし体験後は、【生活が大変である】【苦勞をしている】【身体に負担がある】【高齢者は不自由である】【助けが必要である】と、全てのカテゴリがマイナスイメージであった。その中で、不安や怖さといった心理的負担といった心理的イメージへの広がりもみることができた。水沼らは[5]、高齢者に関するマイナスイメージが強ければ、高齢者と積極的に関わる事ができない、関わる事がストレスになると述べている。しかし、マイナスイメージを経験することにより、体験後の自由記述に「全身が重くなる」と階段やちょっとした段差に気をつける必要がある」「困っている高齢者に声をかける必要がある」「高齢者が過ごしやすい環境を増やすべき」「動きにくいから周りの助けが必要」など、自分自身が高齢者の立場になった時に、どうしてもらいたいかという視点から高齢者への共感的理解と支援の必要性に気づくことができていた。

上記のことから、今回の体験は看護を目指す高校生にとって、高齢者の特徴を理解し、QOLを踏まえた日常生活の支援や、高齢者を取り巻く環境問題や社会サービスシステムについて学習していくためのきっかけづくりとなったと考えられる。我が国においては、高齢者に関する学習や異世代間交流の機会が少なく、高齢者や高齢期について学ぶ機会が少ない[6]。体験後には、疑似体験前の健康的な高齢者イメージについても触れており、プラスイメージ、マイナスイメージの両面から高齢者看護に対する関心を深めることに繋がったと考えられた。

今回の結果から、高齢者疑似体験は高齢者理解の一つの有効手段であることが示され、今後、看護師志望

の高校生はもとより一般の高校生にも高齢者理解を進めるために高校教育などにおいて活用されることを期待する。

5. 結論

本研究において、A 短期大学看護コースの高校生において、高齢者疑似体験前的高齢者のイメージは、マイナスイメージと健康な高齢者のイメージを持ち合わせていたが、体験後はマイナスイメージになった。しかしながら、高齢者の身体的・心理的特徴を理解したことで、高齢者に対する共感的理解と支援の必要性に気づくことができた。

文献

- [1] 内閣府：令和元年高齢者白書，高齢化の状況
- [2] 滝川由美子他：看護学生の高齢者のイメージの変化—老年看護学概論の授業前・後の比較—，香川県立医療短期大学紀要 1, 51-60 (1999)
- [3] 伊藤豊美他：老年看護学実習における看護学生の高齢者に対するイメージの変化，J Nurs Studies NCNJ (9)-1 (2010)
- [4] 安田千寿他：老年看護教育プログラムが看護学生の高齢者イメージ形成過程に影響する要因(第3報)—老年臨床看護論実習前後における高齢者イメージの変化—，人間看護学研究 8, 57-66 (2010)
- [5] 水沼国男他：鍼灸学部学生の高齢者のイメージに関する研究—老人ホーム実習による変化—，全日本鍼灸学会雑誌 55(1), 68-76 (2005)
- [6] 下地敏洋：高校生の高齢者理解に関する一考察，高等学校での授業実践を通して，琉球大学教育学部紀要 90, 213-222 (2017)

高校生における高齢者疑似体験前後のイメージの変化

藤田 和加子

本研究の目的は、高校生が高齢者疑似体験により、高齢者の身体的・心理的特徴をイメージでき、高齢者理解を深めることである。日本の高齢化率は、平成30年に28.1%と過去最高であるが、高齢者や老化に関する教育が不十分な状況である。

A 高校看護コースの2年生29名に対し、高齢者の身体的特徴・時代背景の講義後、高齢者疑似体験を行い、その前後に「高齢者のイメージ」について無記名にて自由記述してもらった。自由回答文の解析にはフリー

ソフトウェア KH-Coder を用いて、テキストマイニングを行い、その後、階層的クラスター分析を行った。その結果、高齢者疑似体験前後ともに、5 クラスターが妥当だとされ、体験前はマイナスイメージと健康な高齢者のイメージを持ち合わせていたが、体験後は、マイナスイメージになった。しかし、体験後の自由記述の中に、「困っている高齢者に声をかける必要がある」「高齢者が過ごしやすい環境を増やすべき」など、高

齢者に対する共感的理解と支援の必要性に気づくことができていることが示された。

キーワード：高齢者・疑似体験・イメージ

論文集「人と環境」Vol. 12 (2019)
大阪信愛生命環境総合研究所編
